

授業実践力を持った造形・美術教育教員養成のためのカリキュラム検討 —附属中学校との連携協力による授業実践の試み—

高橋 智子

Curriculum Study for Art Education Teacher with Teaching Method

—The Trial of Teaching Practice by Cooperation with A Junior High School Attached to the Shizuoka University—

Tomoko TAKAHASHI

【要旨】

本研究は、造形・美術教育教員を志望する学生を対象として、将来学校現場に出た際、自ら授業を計画し実践出来る能力（以下、授業実践力とする。）を持った教員を養成するための、大学の教員養成課程における教科教育のカリキュラム検討を目的としたものである。

【キーワード】 カリキュラム 教員養成課程 造形・美術教育 授業実践力 連携

はじめに

近年の社会の大きな変動を背景に、教員にはより高い専門的知識や指導技術、実践的な指導力等を含む資質能力が求められ、その資質能力を確実に身につけることの重要性が高まってきている。このことは、平成18年7月に中央教育審議会から出された「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」の中でも示されており、この答申では同時に大学での教員養成における改革の必要性及び具体的な方策も示されている^①。これは現在、大学における教員養成課程の組織編成やカリキュラム編成が、上記に示した能力を持った教員養成のために必ずしも十分に整備されていないことを示唆している。まずは、学部段階での教員養成教育の改善・充実を図り、教員養成課程におけるカリキュラム検討を行い、その再編成を行っていくこと^②は、教員養成課程を持つ大学に課せられた緊急の課題となっている。

先述のように、現在教員には様々な資質能力が求められているが、教員にとって学校現場での教育活動の大きな部分を占めるのは授業であることを考慮した場合、学部段階で最低限身につけるべき重要な資質能力のひとつが、授業実践力であるといえる。授業とは、「教材を媒介にした教師の教授活動と生徒の学習活動との三者関係のなかで営まれる動的な過程である。」^③ために、その授業を実践する力は理論と実践を往還し融合しながら育成されると考えられる。しかし現在大学の教員養成課程のカリキュラム構成においては、理論を学ぶ機会に比べて、学校現場で授業実践できる機会は教育実習以外にはほとんど設定されていない。

学生にとって、大学で学んできた理論を実践と結びつけ授業実践力を育成していく機会は、教育実習だけに限られることになる^④。

そこで筆者は、2年前から既存授業科目である「美術教育研究A」（4年生・前期・選択）において、附属中学校^⑤との連携協力による授業実践を試みている。この実践は、造形・美術教育教員を志望する学生を対象とし、授業実践力を持った教員を養成するために導入しているものである。本論では、1年目の反省をまとめ、それを踏まえて実施した2007年度の附属中学校との連携協力による授業実践の報告を行い、実践後に実施したアンケート・レポートを分析・考察することで、この授業実践の成果と課題を明らかにしていく。

I 授業実践力の育成

1. 学部段階での授業実践力育成の必要性

大学を卒業し教員として採用後、学校現場においては当然ながら、ベテラン教員、新人教員に関わらず授業を行っていかねばならない。造形・美術教育教員の場合、特に中学校や高等学校では教科担当が学校に1人だけの場合が多く、新人教員は授業について専門教科の先輩教員に相談出来る状況も少なく、1人で授業を計画し実践していく能力が必要とされる。実際に現在静岡県・静岡市・浜松市が掲げている学校現場で求められている教員像には、授業を柱にした教育実践力を持つ必要性が示されている^⑥。授業実践力は教員採用後も、生涯を通して磨いていくものではあるが、造形・美術教育教員を志望する学生にとって、自分の専門教科に関しての授業実践力を学部段階で高めていくことは、必要不可欠なことだと言える。さらに、この能力育成は、昨今取り上げられている指導力不足教

員の問題や採用1年足らずで離職していく新人教員の問題解決のひとつの糸口にもなると考えられる。

2. 学校現場との連携協力による授業実践の意義

学部で教育実習を終了した学生から、「教育実習を終了した後でもひとりで授業を実践していくことに対する課題や不安を感じる。」という話をよく耳にする。このことは、教育実習で行った授業実践で感じた課題や不安を解決できないまま、教育実習期間が終了している事を示すものである。この課題や不安が解決されずにいれば、授業実践力不足のまま教員になり授業を行っていくことになる。

授業とは、「教材を媒介とした教師と生徒との間の協同構成による営み」^⑥であり、教育実習後の学生の課題や不安もこの営みの中に身を置いた時にさらに自覚されてきたものであると考えられる。学生が感じている課題や不安には、教材-教員-児童・生徒が相互的に深く関わっており、その問題解決のためには、再び学校現場との連携協力による授業実践を設定する必要があると考える。

3. 「美術教育研究A」で育成する授業実践力

静岡大学教育学部学校教育教員養成課程の造形・美術教育教員志望の学生は、1年次から教養科目や、教科に関する科目（絵画、彫刻、デザイン、工芸、美術理論及び美術史）をはじめとし、教職に関する科目を受講してきている。2・3年次で実施される教育実習では、大学で学んだ理論や実技を総合し、学校現場で生徒理解をもとにした授業実践を通して、教科教員としての授業実践力を高めていく。教員が授業を計画・実践する際、「目標と指導と評価の一体化に立っての授業設計及び授業実践力が大切なのであり、これが今必要とされる授業力の前提条件であり、基本的な考え方である。」^⑦とされるように、図1で示した一連の教育課程の構造を理解し、授業を計画・実践する必要がある。この構造を理解していなければ、教科において育成すべき目標が明確化されないまま、あやふやに授業を行っていくことになる。教員は、教育目的・目標と手段（教育内容、方法、計画、評価）を同時に考え、授業を創造しなくてはならない。学校教育の第一の特徴が、この教育課程にあるといえ、学部段階で実践を通してこのことを理解しておく必要がある。もちろん教育実習期間でも、これらの事を理解しながら授業づくりを行っていくが、実習期間中は学ぶべき内容が多岐にわたっており、教科指導のみに集中は出来ない。よって、「美術教育研究A」では、教育実習後に再び、図1に示した一連の教育課程の構造の理解の上に立った教科の授業づくり（教材研究）を行い、その能力を高めていくことを目指した。

「授業の質」とは「教材の質」であり、それは「教材研

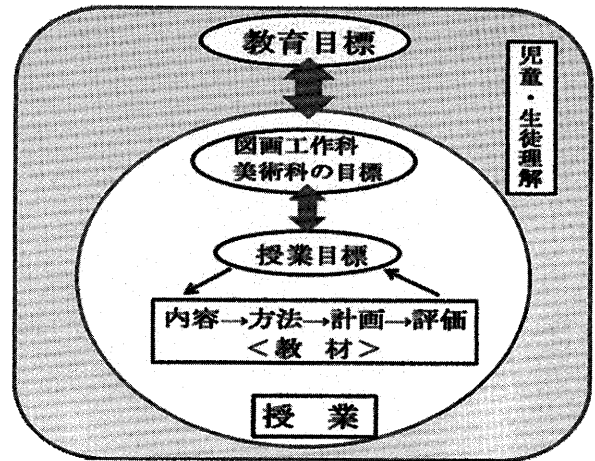


図1 教育課程の構造

究の質」である。教育目標、教科目標を自覚した教材研究能力は、教員にとって最も欠くことのできない授業実践力のひとつだと言える。また1年後に教壇に立つ学生にとっては、教科授業で掲げた目標達成のための児童・生徒に対する具体的な授業内容の指導方法も大きな課題になると考えられる。そこで、授業過程における具体的な指導方法に関する能力も育成すべき授業実践力として目標に掲げた。以上、2点を「美術教育研究A」で育成すべき授業実践力とした。

II 「美術教育研究A」の概要

1. 目標・内容・対象者

「美術教育研究A」は、4年生・前期（選択）に開講されている教職に関する科目である。附属中学校との連携協力による授業実践の試みは、2006・2007年度の2度にわたり実施している。その授業目標と主な授業内容、対象者を図2に示す。

授業名	「美術教育研究A」（4年生/前期/選択）	
対象者	受講を希望した教育学部の4年生	
授業目標	○教育課程の構造の理解の上に立った教科の授業づくり（教材研究）能力の育成 ○授業過程における教科の指導方法に関する能力の育成	
主な授業内容	2006年度	2007年度
	①ビデオ鑑賞 ^⑧ （学校現場からのメッセージ）	①ビデオ鑑賞 （学校現場からのメッセージ）
	②附属中学校との連携協力による授業実践 <鑑賞の教材研究>	②附属中学校との連携協力による授業実践 <鑑賞の教材研究>
	③-1 公立中学校の教員（美術）との交流 ^⑨	③-2 ビデオ鑑賞 （鑑賞に関する内容）

図2 授業目標・内容・対象者

この授業では、目標とする授業実践力育成と共に、学生の学校現場への理解を深めるために、図2の①や③-1の内容も同時に盛り込んでいる。授業の主となる活動は、図2の②に示した附属中学校との連携協力による授業実践となる。

2. 授業実践における条件の設定

過去2回の「美術教育研究A」において、附属中学校との連携協力による授業実践の際、以下の2つの条件を設定した。

- ① 附属中学校の美術教員が編成した教科カリキュラム内の単元（題材）を利用する。
- ② 学生と附属教員の協同による教材研究を同時進行で進めていき、授業実践を行う。

以上の条件を設定する利点には、以下の3点があげられると考えられた。

- ① すでに附属中学校の教員により、生徒観を考慮した教育目標、授業目標、題材が決定されているので、学生が教科カリキュラムの一連の流れを壮観し、「何のために」「何を」「いかに」教えるかという「目標-内容-方法」の関係を理解できる。
- ② 学生が、決定されている教育目標や教科目標から教員の設定した題材の意図を分析でき、その後の教材研究に時間をかけることができる。
- ③ 学生と附属中学校の教員が共に教材研究を行っていくことで、学生が現場教員の持っている指導技術を学び、授業過程での具体的な指導方法を学ぶことができる。

「美術教育研究A」では授業目標達成のために、以上の条件を設定し、学校現場での授業実践に向けて教材研究を行っていった。またこの条件の設定が、大学の既存授業科目で実施する授業実践の特徴を明確にするひとつの要素となると考える。

III 附属中学校との連携協力による授業実践

1. 2006年度授業の問題点と反省事項

附属中学校との連携協力による授業実践の試みは、2006・2007年度の前期に2度にわたり試みており、2007年度は、2006年度の反省事項を踏まえて授業実践を実施した。2006年度の授業では、附属中学校との連携協力による授業実践を行った初年度ということもあり、実施上の諸問題が色々と浮き彫りになった。まず2006年度の授業実践の概況を簡単に示し、その反省点を述べる。成果については、2007年度とまとめて示すことにする。

(1) 授業の概況

2006年度の「美術教育研究A」の受講生は24名であり、この時受講生の進路希望の状況は、小学校教員志望者、中学校（美術）教員志望者、高等学校（美術）

教員志望者、大学院進学志望者、学校以外の機関への就職志望者と様々であり、教員志望ではない学生も受講生に含まれていた。講義の対象者は、「受講希望した教育学部の4年生」としていたために、講義に興味を持った学生が進路に関係なく受講したことがわかる。授業のオリエンテーションの折、この授業の主旨や目的を説明したが、進路希望の状況に関わらず、受講を取りやめる学生はほとんど居なかった。2006年度に附属中学校との連携による授業実践で取り上げた題材は、「生命（いのち）の面～私の心から生まれた分身～」<造形立体活動/2年生>であり、この題材は2005年度の静岡大学附属島田中学校教育研究発表会でも取り上げられた鑑賞を含んだ造形立体活動（全17時間）であった。この内容は、研究紀要として冊子になっており、学生たちが教育課程の構造や授業内容を壮観しながら教材研究を行っていくには、最適な題材だと考えた。この題材は、2005年度の反省と、この授業との連携協力による教材研究のもと、2006年度後期（10月以降から）に再び島田中学校2年生で実施された。

大学の授業内ではこの研究紀要をもとに、教材開発に至るまでの教育目標・授業目標の設定や生徒の実態の把握、題材の内容、授業の方法・計画・評価に関して、まず個人で読み込んでいき理解を深めた（図3）。次に全員でディスカッションを交えながら、題材に関する共通理解を図っていった。その後授業内の鑑賞に注目し、前年度の成果や課題、生徒の表れを加味しながら、生じた課題を解決するためには、どのような鑑賞教材が必要か検討を行っていった。個人で教材を檢

2005年度 島田中学校教科テーマ等	
目指す人間像	社会の中で、自らの力で生活や人生を豊かに送る人間
美術科の目指す生徒像	美しさや面白さを感じ、造形的に考え、判断し自分らしく表現や鑑賞ができる生徒
教科テーマ	自分らしい表現を追求できる授業づくり～「発想」を「こだわり」へつなげるための指導と支援の工夫～
題材名	「生命（いのち）の面～私の心から生まれた分身～」(2年生) <課題>「こだわり」を生むための指導と方法
2006年度連携授業実践における教材研究テーマ	「こだわり」につなげる鑑賞の在り方<鑑賞教材開発・研究>

図3 2005年度 島田中学校教科テーマ

討した後、意見が似通っている学生同士でグループを作らせ、グループで教材研究を行うようにした。グループで教材研究を行わせた理由は、①学校現場に出たら、1人で授業を計画し実践していくことが多くなる教科なので、グループ活動を通してできるだけ多くの人と意見を交換していき、問題発見→検討・追及→解決→問題発見の絶えざる連鎖の中で、教材研究の経験を深め、題材に対する理解を広げることができる、②学校現場では1人で教育活動を行っていくわけではなく、他の教員と協力していく必要がありその訓練にもなる、以上2つの理由からグループ活動を取り入れた。4～6人で1つのグループを編成し、全部で5つのグループができた。そのグループごとに本時案と教具・ワークシート等の作成を行い、最終的にはその提出を求めた。その後、後期に附属中学校と連携して授業実践を行う予定を立てた。

(2) 授業計画

附属中学校での授業実践に向けて、大学での授業計画を図4に簡単に示した。先述している内容や、図4を見てもわかるように、2006年度に教材研究の対象として選択した題材が中学校で10月からの実施となり、大学の授業自体は前期で終了するが、中学校での授業実践については後期以降にずれ込んでしまうという状況が生じてしまった。

授業計画 (2006年度・前期)	
題材名	「生命 (いのち) の面～私の心から生まれた分身～」 (2年生)
前期授業内の活動	① 研究紀要の読み込み (個人)
	② 研究紀要の内容把握 (個人・全体)
	③ 研究の構想・成果・課題の把握 生徒理解・分析 (全体)
	④ 昨年度の授業風景ビデオ鑑賞 (生徒の実態把握のため)
	⑤ グループによる教材研究<鑑賞教材>
	⑥ 各グループによる本時案・教具作成
	⑦ グループ発表→再検討→本時案の作成
	⑧ 本時案・教具等の提出 (7月末日)
授業外の活動	⑧を附属中学校の教員へ提出 (8月) ↓ 附属の教員による検討・アドバイス ⑨ <メールにて> (8月末日) ↓ 本時案の再検討 (9～10月) ↓ 附属中学校での授業実践 (後期・10月以降～2月ごろまで)

図4 2006年度 授業計画

(3) 授業実施上の諸問題

図4の計画で授業を進めていたが、授業実践にあたり諸問題が生じてきた。まず一番の問題点が、附属中学校と連携した授業実践が後期以降 (10月～2月頃) に設定されていたので、受講生の全員が4年生だったこともあり、就職活動の時期や卒業論文・卒業制作に取り組む時期と重なってしまい、学生の授業実践へ気持ちが離れてしまったことがあげられる。教員志望の学生は授業実践を希望していたが、教員志望でない学生は気持ちが離れていっており、両者との間に授業への取り組みの姿勢の違いが出てしまった。また授業実践に向けての教材研究は、グループで行っており、ひとつのグループの中に、授業実践を行いたい学生と、そうでない学生が混在してしまうという状態に陥ってしまった。

図4の⑨の部分に関しては、筆者が附属中学校の美術教員との連絡係を行い、その内容をグループリーダーに伝え検討してもらっていたが、前期の講義が終了した時点で、グループが集合することすら難しくなってしまった。結局、授業当初は、各グループが附属中学校で授業実践を行わせてもらう予定であったが、自分たちの本時案を附属中学校の教員に検討してもらい、改善を図ったものを代理授業してもらうという方法をとることになった。またその内容をきちんとフィードバックできたのは、5グループ中1グループだけであり、このことは1年目の実践で筆者自身がかつても反省すべき事項である。2006年度の附属中学校での授業実践は、反省すべき事項が多いものとなり、この結果から次年度の附属中学校との連携協力による授業実践では、①教材研究の対象として選択する題材は、前期中に授業実践できる題材に設定する、②受講生を造形・美術教育教員志望の学生に絞る、③授業実践後のフィードバックをきちんと行うことなどが課題となった。

2. 2007年度授業の概況

2007年度の「美術教育研究A」では、前年度の反省をいかし、前期中に実践できる題材を附属中学校の教員と検討を行い決定した。また授業の受講に関して、オリエンテーション時に授業の目的と主旨を前年以上に丁寧に説明し、教員志望の学生が受講することが望ましいことを説明した。

(1) 対象者

2007年度の「美術教育研究A」の受講生は6名であり、この時の受講生の進路希望状況は、小学校教員、中学校 (美術) 教員、高等学校 (美術) 教員のいずれかを希望していた。つまり受講生全員が、全て教員志望の学生であった。

(2) 授業目標・内容

2007年度の「美術教育研究A」で育成する授業実

2007年度 島田中学校教科テーマ等	
目指す人間像 教科テーマ	豊かでしなやかな感性を持った人間の育成
美術科の目指す生徒像	作品制作や鑑賞活動に主体的にかかわり、 ① よりよく表現したいという思いを持ち試行錯誤を繰り返しながら表現し、自分に自信を持つことができる生徒 ② 他者のよさをみつけ、自分だけでなく仲間のよさも受け入れ、仲間とともに自分を語ることでできる生徒
3年生で 目指す生徒像	○自分のよさを受け入れ、自分を語る ○仲間のよさを受け入れ、仲間と共に、しなやかに自分を語り合う
題材名	ピカソからのメッセージ 「二人の恋人」(3年生) <鑑賞>
2007年度 連携授業実践 における 教材研究テーマ	①自分の思いを持ち、②仲間と共に語り合う姿を目指した鑑賞の在り方 <鑑賞教材開発・研究>

図5 2007年度 島田中学校教科テーマ

実践力(授業目標)は2006年度と同様に設定し、図2に示した内容で授業を展開した。また附属中学校との連携協力による授業実践の条件も、2006年度と同様とした。

(3) 授業の概況

2007年度では、附属中学校の研究テーマも新たに、その中で教材研究を行っていくことになった。その概要は図5に示す。今年度の授業実践で取り上げた題材は、「ピカソからのメッセージ『二人の恋人』」<鑑賞・3年生>(全5時間)であった。学生と附属中学校の教員が連携して授業実践を行う時間は、単元構想の最後の時間(5時間目)となった。今年度も、前年度と同様の理由から、グループで教材案の作成を行うようにした。今回は、受講生が6名だったため、全員でひとつのグループを作り、教材研究を進めていった。

(4) 授業計画

授業計画については、図6に示す通りである。今年度は前年度の反省より、附属中学校との連携協力による授業実践を前期内で試みることができるよう計画した。今回教材研究する題材がどのような目標のもと決定された題材なのか、教育目標・授業目標・計画等

を確認し、題材が選出された意図などに関して、指導案を個人で読み込んでいき理解を深めた。その後、全員でディスカッションを交え、題材に関する共通理解を図っていきながら、授業目標を達成するためには、どのような授業展開が必要か教材研究を深め検討を行っていった。前年度の授業では、生徒理解・実態把握のために、附属中学校での授業風景のビデオ鑑賞を授業内に設けた。今回は学生たちが授業実践を行う題材を同時進行で進めているクラスがあり、その授業を筆者が授業参観していたので、授業内で指導案・本時案を資料として配布し、その授業報告を行った。そこで深めた生徒理解を踏まえ、グループで本時案とワークシートを完成させた後、それを附属中学校の教科担当に提出した。附属中学校の教科担当は、学生の提案した本時案に目を通し、その内容を加味しながら授業を再構築し、授業実践当日を迎えることになった。

さらに今年度は、前年度の反省のもと、学生が授業実践した内容を振り返り反省する時間、つまりフィードバックする機会も持てた。ひとつは、附属中学校での実践授業後の協議会への学生の参加であり、もうひとつは大学へ帰ってきてから授業内でのまとめの時間であった。この2つの話し合いを通して、自分たちが吟味した授業案について反省と再検討を行い、まとめを行うことができた。

授業計画(2007年度・前期)	
題材名	ピカソからのメッセージ「二人の恋人」(3年生)
前期 授業 内の 活動	① 指導案の読み込み(個人)
	② 研究の構想・授業内容の把握(全体)
	③ ピカソや授業で取り扱う2作品に関する教材研究(個人・全体)
	④ 筆者による先行して行われた授業実践の報告(生徒理解のため)
	⑤ 各グループによる本時案・ワークシートの作成・検討・完成
	⑥ 学生の作成した本時案をFAXで附属中学校に送付
	⑦ 附属の教員による検討→実践授業
	⑧ 授業参観→授業後協議会への参加
	⑨ まとめ(大学の授業内)
	⑩ アンケート・レポートの提出

図6 2006年度 授業計画

3. 授業実践の概要

(1) 日時

授業実践は、2007年7月上旬に静岡大学附属島田中学校で、第1校時目(50分)に行われた。

(2) 対象生徒

今回の授業対象生徒は3年生の40名（男子20名、女子20名）であった。

(3) 授業者

授業は附属島田中学校の美術担当の教員が行った。前年度は計画不備のため、学生自身が授業を行うことができなかったが、その授業実践の様子をビデオ[®]によりフィードバックできたグループの学生から、自分たちが授業者でない方が客観的且つ冷静に授業を観察し、生徒の様子や本時案の良い点・課題等を把握することができるといった意見が出ていた。この意見を取り入れ、今年度も学生が直接授業を行うことはせず、授業に参観させてもらうことで、自分たちが附属の教員と教材研究し内容を深めてきた授業を客観的に観察することができるかと判断した。

(4) 授業内容

実践された本時は、5時間扱いの鑑賞の単元「ピカソからのメッセージ（その生き方を語る）」の5/5にあたる授業であった（図7）。

単元名	「ピカソからのメッセージ（その生き方を語る）」（全5時間）
本時題材名	「二人の恋人」（5/5時間目）
本時目標	2枚の女性像を様々な視点から見比べることで、美術作品には作者のメッセージが込められていることを理解する。また自分なりの思いを持ち、仲間と共に語り合うことができる。

図7 授業実践当日の授業目標

この授業では、ピカソの描いた2人の女性ドラ・マールとマリー・テレーズの作品を鑑賞し、その2枚の作品を様々な視点から見比べることで、美術作品には作者のメッセージが込められていることを理解し、さらに自分なりの思いを持ち、仲間と共に語り合うことができることが目標とされた。

(a) 導入

はじめに生徒に2枚の女性の作品を提示し、その作品から2人がどのような女性だったのか想像させた。このとき小集団（5～6人）を作り、2枚の絵を見比べさせ、女性の性格を表現している部分や要素を小集団で見つけさせた。絵を見ながら女性の性格を読み取るのに手掛りとなる要素（形・色・線・表情・背景など）を取り上げていく手段として「付箋紙に気づいた点を書き込んでまとめていく」という学生が考案した方法が採用になり、実際の授業で取り入れられた。学生のアイデア段階では、付箋紙はワークシートに貼り付けていくものとなっていたが、附属中学校の教科担任の判断により、直接作品の写真の中に張り付けていく方法をとった（図8）。



図8 授業内で付箋紙を使用した場面

(b) 展開

小集団で2人の女性の性格を判断するための手がかりを見つけ、それを手がかりとして2人がどのような女性であったか想像して、個人で各自の美術ノート（調べ学習などに活用している個人ノート。授業の板書などもこのノートに記入している。）に記入していった。その後発表させ、意見を全体で共有していった。

(c) まとめ

2枚の作品から2人の女性像を想像しながら、作品には実際の本人の性格や雰囲気も描きこまれていることなどを生徒の意見を取り入れながら、資料等を用いて説明していった。絵を深く鑑賞していけば、ピカソの思いが伝わってくることや自分以外の仲間の意見により、作品の見方が深まったことを再確認した。また生徒が授業外で調べてきているピカソの作品を発表させるなど、生徒理解の上に立った授業展開を行った。

(d) 授業後協議会

授業終了後、授業者と附属中学校の協力員の教員（3名・他校の美術教員）、大学生と筆者を交えて、授業後協議会を開催した。授業者による反省や、参観していた先生方から積極的に授業に関して意見が交わされ、授業内容・展開の再検討が行われた。

(e) 大学でのまとめ

授業実践が終了後、大学の授業内で授業実践を振り返り、自分たちの授業案と実際に行った本時の授業とを比較しながら、授業案の再検討を行った。授業実践前に、学生間でもかなり時間をかけて教材研究を行い、目標の把握や教材などを捉えられていたために、本時に学ぶべきことや改善点なども交えて積極的に授業を振り替えることができ、ディスカッションすることができた。

IV 学生アンケート・レポートの結果と考察

1. 授業実践の成果

授業での一連の教材研究を通して、学校現場での授

業実践を行い振り返った後、学生にはアンケートとレポートの提出を求めた。アンケートには授業実践後の感想やそこで学んだこと、授業実践することの利点や教材研究に対する認識の変化などに関して項目を設け、回答してもらった。レポートでは、授業実践を通して学んだことをテーマにして提出してもらった。それをまとめたものを、図 9 に示す。(2006 年度実施分も含む。) このアンケート・レポートでの学生の意見等を分析・考察し、この授業実践の成果を以下に示していく。

まず、「美術教育研究 A」で育成したい授業実践力として目標としていた「教育課程の構造の理解の上に立った教科の授業づくり(教材研究)能力」に関わる項目では、今回の授業実践を通して、教育目標・授業目標達成のために題材が設定され、その題材により具体的にどのような力を児童・生徒につけさせたいのかを教員が理解した上で授業研究(教材研究)を行っていく必要性を改めて認識したという学生が特に多かった。教育実習の段階では、単元構想だけで独立して考えていたり、生徒理解と授業内容が結び付かなかつたりしていた学生たちが多かったようだが、今回の授業実践の中で中学校の場合 3 年間を通して教員が目指す生徒像を思い描き(目標)、見通しを持って授業を計画していくことの重要性を実感している。今回の授業実践では、以上のことを意識して教材研究行っていたことをこの結果は物語っていると言える。

2 つ目に育成したい授業実践力として目標としていた「授業過程における教科の指導方法に関する能力」に関わる項目では、学生が教材研究中に感じた児童・生徒に対する指導の困難さや疑問点等を、附属中学校の教員の授業実践を参観する中で、それに対応する具体的な方策を学ぶことができたという意見が多かった。資料準備に関することから、その提示の方法、言葉のかけ方、板書計画等に至るまで、様々な視点から学びが多かったことが学生の意見より窺える。具体的に言えば、2006 年度の授業実践の折、学生が地域の作家に直接インタビューを行いその内容を授業中の鑑賞授業で扱う場面があった。学生は地域作家にインタビューするという貴重な経験を通して、生徒に伝えたい内容や思いも多く出てきていたのだが、それを具体的にどのように生徒に伝えていくのか形に出来ずにいた。そこで附属中学校の教員がその内容をまとめパワーポイントを使用してスライドを作成し、生徒に分かりやすく説明する方法を提示してくれた。学生はその提示方法等を見ることで、生徒に伝えたい内容をいかに伝えていくかという方法を学ぶことができた。現場の教員と共に教材研究をし、学校現場での授業実践に参観することで、より具体的な問題や疑問も生じてきたが、それに対する解決方法も附属中学校の教員の姿を見ることで学ぶことができたと言える。

さらに、アンケートとレポートを分析していくと、「生徒理解に関する能力」に関わる項目についても、学びが多かったことがわかる。学生たちは教材研究を行っていく中で、生徒理解の重要性を感じ、実際に実践授業における生徒の姿や提出されたワークシート、ノート等から生徒理解を深めていき、さらに授業の中で附属中学校の教員が使用していた座席表を利用した生徒理解の方法を学んでいる。この座席表については、ほとんどの学生が感銘を受けており、教員のきめ細かい生徒観察を通して授業が成立していることを肌で感じた学生が多かったようである。

また教材研究で取り入れていたグループワークでは、グループだと意見がまとまらず時間がかかるといった意見もあったが、同時に色々な意見を交わすことで教材研究が深まり、自分の視点も広がり、お互いの良さを認め合い高め合っていたとその良さを評価している学生がほとんどだった。2006 年度に関しては、教員志望の学生とそれ以外の学生との間に出来た授業に対する姿勢の違いから、グループでの教材研究に関する困難さを強く感じていたようであった。受講生を教員志望の学生に絞った 2007 年度は、グループによる教材研究の困難さよりも良さを感じている学生がほとんどであることがわかった。

2006・2007 年度の 2 度にわたり実施してきた学校現場との連携協力による授業実践であったが、実際に授業実践を経験したグループの学生すべてが、授業実践を経験できて良かったと述べており、授業全体を通して、自分が教員として学び続けることの重要性や教育に対する情熱・意欲・使命感を感じたという意見も多かった。学校現場との連携協力による授業実践により、学生 1 人ひとりの目指す教師像の形成を促したとも言える。

以上のことから、本研究における授業実践の成果を以下の 4 点にまとめる事が出来る。

- ① 附属中学校の美術教員が編成した教科カリキュラム内の単元(題材)を利用し教材研究を行うことで、学生にカリキュラムの一連の流れを客観的に把握させることが出来、「何のために」「何を」「いかに」教えるかという「目標-内容-方法」の関係を理解しながら教材研究を行う能力が高まった。
- ② 学生と附属教員の協同による教材研究を同時進行で進めていき授業実践を行うことで、現場教員の持っている指導技術から、授業過程での具体的な指導方法を学ぶことができた。
- ③ 授業実践を通して、生徒理解が深まり、自分の目指す教師像の形成も促された。
- ④ グループによる教材研究により、教材に対するより深い理解が促された。

育成したい授業実践力	授業実践後の学生の気づき・意見
<p>教育課程の構造の理解の上に立った教科の授業づくり (教材研究) 能力</p>	<p>○授業は目標に向かって積み重ねていくものであることを実感した。目標達成のために、題材が設定され、その題材で具体的にどのような力を児童・生徒につけさせたいのかを教員が理解した上で授業を行うことが重要であり、そのためには教材研究の重要性を感じた。</p> <p>○教員がどのような考えで目標を立て、授業を作っていくのかわかった。3年間の見通しなど。</p> <p>○今までは、教材→目標と考えており、目標→教材であることが実感できた。</p> <p>○何のためにこの教材を取り上げるのか、自ら考えるようになった(目的・目標の明確化)。</p> <p>○生徒理解と授業が一直線上にあることに気づかされた。これまでは一つ一つを別々に考えていたのですが、今回の授業実践の中で、はっきりと繋がった。</p> <p>○生徒理解の深さや生徒の実態を把握すること大切さを痛感した(実習ではできてなかった)。</p> <p>○生徒のあらゆる意見・発想に対して、教員が対応できるように教材研究や生徒理解の必要性を感じた。実際の授業では、生徒から様々な疑問が出てくるので、教材研究をしっかりと、自分の中でも、きちんと深めて整理しておかなければ、スムーズな授業の流れを作ることはできない。</p>
<p>授業過程における教科の指導方法に関する能力</p>	<p>○自分たちが提案した案よりも、より分かりやすい方法で付箋紙を授業に取り入れていた。</p> <p>○生徒の小さな声を拾う能力。生徒1人に対応している時でも、クラス全体の雰囲気把握している。逆も言える。常にいろんな生徒の表れに目を向ける。</p> <p>○机間巡視は赤ペンを持って動く。コメントの書き方、板書の仕方も参考になった。</p> <p>○授業内容の説明の時に、実際のもの(写真)があると理解しやすく、説得力がある。</p> <p>○スムーズな進行の方法・展開の仕方や、準備の面(配布物・プリント・写真など)で自分たちにはまだまだ足りない部分があることに気づけたので良かった。</p> <p>○生徒の意見の取り上げ方・言葉かけや発表のさせ方、騒がしくなった時の対応等が参考になった。</p> <p>○作品を提示するためのコピーが、黒板用・グループ用・個人用と準備されており、自分ではそこまでの配慮は思いつかなかった。これには、生徒の気持ちになり、どうやったら授業内容を理解しやすくなるか考えることが必要だと感じた。</p> <p>○美術が苦手な子に対する指導方法として、授業内で生徒が調べてきたことを発表させる機会を設けて、生徒が活躍する場を作っていた。</p> <p>○授業内で、全体・個人・集団で行う活動を目的によって使い分ける必要がある。</p> <p>○自分たちが生徒に伝えたい内容をどのように生徒に提示したらよいかわからなかったが、附属の先生によりパワーポイントにさせていただき、その方法が理解できた。</p>
<p>生徒理解に関する能力</p>	<p>○座席表を使用した生徒理解の必要性。</p> <p>○具体的にどのように1人ひとりの生徒を理解し、指導を行っていくのかわからなかったが、ひとつの方法として座席表をつくるなど参考になった。座席表には、1人ひとりの美術に対する考え方や興味関心事について等が詳しく記されていた。</p> <p>○ちょっとした生徒の反応に対しての気づきの重要性に気づいた。</p> <p>○想像していた以上に、生徒の豊かな発想力に驚かされた。実際に現場の生徒に関わって生徒理解が深まった。生徒1人ひとりがとても大きな可能性や力を内に秘めていることが理解できた。</p>

附属との連携協力による授業実践を通して
<p>○教員への情熱が湧いてきた。刺激になった。</p> <p>○教育実習では、今回のようにひとつの教材を何時間もかけて考えていくことができなかつたので、教材研究を甘く見ていた部分があったと反省した。教材研究に終わりはないと感じた。</p> <p>○自分たちの授業案の良い点・改善点を客観的に見ることができ、参考になった。</p> <p>○現場の先生と協議会で交流が持てたことがよかった。現場の先生方の教育や授業に対する熱い思いや真剣さが伝わってきた。それがすごくうれしく、感動した。自分が教員になった時にも、忘れたくないこういった熱い思いを再確認させてくれた。</p> <p>○教育実習後は、学校現場での授業案作成の機会がなくなるので、実践的な活動が減ってしまうが、大学の授業で今回のような活動を行うことができるのは貴重だった。授業実践できる授業をもっと受けたたい。</p> <p>○美術を苦手感じていても、授業や教員の方で変わることがわかった。</p> <p>○何度も授業のシミュレーションを行っていくことが必要だと感じた。</p> <p>○自分たちの授業案よりさらに改善された授業を実践していただいたので、非常に参考になった。</p> <p>○生徒の内面に語りかけることのできる美術教育の魅力に気づけた。</p> <p>○実際に授業を見ると、予想していなかったことがたくさん現れ、改善点がたくさん見えてきた。</p> <p>○教材研究を通して、自分自身教師と生徒の2つの視点から学ぶことができた。</p> <p>○生徒との信頼関係の大切さに気づいた。</p> <p>○教材研究への意欲が湧き、生徒に対する願いが具体化した。</p>

図9 学生にはアンケートとレポートまとめ

授業実践力		自分に必要だと思う授業実践力	
		教育実習終了後の 3・4年生	教育実習前の2年生 (美術科教育法Ⅱ受講前)
①	教科の専門的な知識・技術・技能に関する能力	・教科の専門的な知識・技術・技法	・教科の専門的な知識・技術・技法 ・用具の使い方 ・造形能力
②	教材開発・研究に関する能力	・題材に対する深い理解 ・教材研究力 ・教材を客観的に見る力	・題材を見つける力 ・教材研究力 ・成績評価
③	指導方法に関する能力	・授業のスムーズな進め方 ・授業目標達成のための適切な指導 ・授業内容を生徒に伝える時の適切な指導方法 ・授業内容のわかりやすく伝えるための簡潔な提示方法と説明の方法 ・児童生徒のやる気や能力を引き出す言葉かけ ・気持ちをつかむ指導方法 ・児童生徒の意見の取り上げ方 ・苦手な子への指導方法 ・板書計画能力	・授業の進め方 ・話し方、声のかけ方 ・児童生徒への伝え方 ・上手な教え方・叱り方 ・適切な指導の仕方 ・苦手な子への対応
③	生徒理解に関する能力	・生徒の実態把握力 ・洞察力 ・コミュニケーション能力	・コミュニケーション能力
④	カリキュラム編成能力	・単元の見通しだけでなく、図1に示されたカリキュラムの流れの把握力	・教育内容の把握 ・目標の設定方法 ・授業計画力
⑤	その他	・豊かな人間性	・協調性、積極性 ・現代社会に関する知識

図 10 自分に必要だと感じる授業実践力

特に①と②の成果により、今回「美術教育研究A」の授業目標であった授業実践力の育成が促されたと考えられる。

実際に教育実習終了後の学部生が、具体的に教科専門の教員としてどのような授業実践力が自分に必要だと感じているのかを分析するために、今年度個人的に話を聞く中であげられた主な意見を図 10 にまとめた。図の左側に教育実習終了後の3・4年生、右側に教育実習前（「美術科教育法Ⅱ」受講前）の2年生^⑥が自分に必要だと感じている授業実践力を配列した。配列後改めて図を見ていると、両者が必要であり獲得したいと感じている授業実践力には共通点もあるが、違いがあることにも気づく。2年生は特に教科の専門的な知識・技術に関する能力や、目標<何のために>内容<何を>計画<どれだけ>教えるのかというカリキュラム編成能力の育成について学ぶ必要性を感じている学生が多いことがわかる。一方、教育実習が終了した3・4年生に関しては、生徒理解に関する能力や<いかに>教えていくかという具体的な指導方法に関する能力の育成の必要性を感じている学生が多いことがわかる。3・4年生では、大学での講義・演習・実技や教育実習などを通し、特に生徒理解に関する能力や授業課程における指導方法に関する能力に課題や不安を感じている学生が多いことが分析できる。これは教育実習での授業実践を経験することで、授業の過程が、「絶えずゆれ動き、どこに展開していくかも予想しがたい曖昧性を孕んだ複雑な過程である」^⑦ことを自ら

が実感した結果生じてきた課題とも言える。

今回「美術教育研究A」で行った学校現場との連携協力による授業実践では、上記に示す生徒理解に関する能力や授業課程における指導方法に関する能力が高まっていることがアンケートやレポートから分析できており、学部4年生の時期に学校現場での授業実践を組み込むことの意義と成果をここにも見ることができ

2. 授業実践の課題

今回授業実践後の学生からの要望としてもっとも多かったのは、授業実践前に生徒の実態把握や生徒理解をより深めながら教材研究を行いたかったという意見であった。今回附属中学校と大学の学生の橋渡しをしていたのは筆者であったが、授業風景をビデオで見せることや参観授業の報告だけでなく、より深く生徒理解を行っていくために、学校現場とどのように連携を図っていくかはこれからの課題となる。また連携を継続させていくには、附属学校と大学の両方にとって利点がなければ、連携協力は長続きしない。今回の授業実践では、附属中学校は学生の授業実践力を育てる場として、また大学は学校現場にとって教材研究を深化させていく手助けを行うことができた。このような双方にとって有意義な連携協力の在り方を、これからも模索していく必要がある。また、今回受講した学生から学校現場と連携協力した授業実践をもっと早い時期にも行って欲しいという意見が出た。実際に教育実習

前にこの授業を受講した学生（4年生）が居たが、その学生は教育実習前に「美術教育研究A」を受講したことで教育実習中に学んだことが役に立ち、実際に授業実践で扱った教材を自分なりに再構築し直して研究授業を行ったという話を直接聞いた。今回は教育実習後を想定して、その段階で必要だと思う授業実践力を目標に掲げ学校現場との連携協力による授業実践を試み、そこに成果を見ることが出来たが、その実施時期やタイミングについては、他の科目との関わり合いや、授業実践を行うことでどのような力を学生に身に付けさせたいのかを明確にしなが、再度検討が必要であると考えている。

おわりに

本論では、授業実践力を持った造形・美術教育教員を養成するための大学の教員養成課程における教科教育のカリキュラム検討を目的とし、学部4年生で実施した附属中学校との連携協力による授業実践の報告を行い、その成果や課題を明らかにした。これからも引き続き、今回の授業実践の成果と課題を踏まえながら、将来学校現場に出た際、授業実践力を持った造形・美術教育教員の養成のためのカリキュラムの検討を行っていきたいと考えている。そのためには、造形・美術教育教員に必要な授業実践力の分析をさらに進めていくと同時に、造形・美術教育の教育内容などを整備し、学校現場との連携協力による授業実践と大学での既存授業科目が系統的に絡み合うようなカリキュラム検討を行っていく必要があるといえよう。

謝辞 授業実践にあたり大変お世話になりました静岡大学附属島田中学校村松裕幸先生（当時）、道越洋美先生に心より御礼申し上げます。

註

- ①この答申の中で、学部段階では「教職実践演習（仮称）」の新設・必須化、教育実習の改善・充実、「教職指導」の充実などが示され、更に大学院では、高度専門職業人養成のため、「教職大学院」の創設が示されている。
- ②教員養成を行う大学では、独自に改革や実践が進められており、静岡大学教育学部では各教科で教科専門と教科教育の教員が連携した「教科内容指導論I」（2年・後期）の実施が平成19年度後期より開始されている。平成21年度以降には、「教科内

容指導論II」（3年・前期）も実施される。

- ③高垣マユミ「授業デザインの最前線 理論と実践をつなぐ知のコラボレーション」北大路書房、2005、p.124.
- ④近年、学生はティーチングアシスタントなどによる制度も利用し、自主的に学校現場への参加を行っている。しかしこれは教員の補助的な役割をするものであり、具体的な教科の「授業実践力」を育成する機会としては機能していない可能性が高い。
- ⑤静岡大学附属島田中学校
- ⑥静岡市教員採用選考試験・静岡県教員採用選考試験、浜松市立小・中学校教員採用選考試験の募集要項に記載されている目指す教員像などを参考にして分析を行った。
- ⑦同上 p.125.
- ⑧梶田毅一「授業力を磨く」『教育フォーラム第37号 授業力を磨く—内面性を重視した学習指導』金子書房、2006、pp.15-16.
- ⑨筆者が以前勤務していた公立中学校などの先生方に協力いただき、作成したビデオである。取材した先生方（30才未満の若手教員3名・50才以上のベテラン教員1名・美術教員3名・養護教諭1名）に、教員生活の中で実感している教員に必要な資質や学生に対する願い、学生時代に蓄えておくべき力などに関するコメントを編集したものである。
- ⑩静岡県の公立中学校に勤務されながら、静岡大学大学院に在学している中学校美術の教員に協力頂き、学生が自らの疑問や悩みを質問できる場を設定した。2007年度も③-1の内容を組み込む予定だったが、ご協力いただく先生と予定が合わず2007年度の実施は見送ることとした。
- ⑪2006年度行った授業実践は、学生による授業を行うことができず、附属の教員による代理授業を行ってもらったが、その授業の様子をビデオに撮影してもらい、後日そのビデオ鑑賞を行うことで、学生たちに授業当日の様子を示した。
- ⑫学年による問題意識の違いを明確にするために、比較検討した。2年生の項目については、「美術科教育法II」の受講生を対象に、授業開始時に実施しているアンケートを参考にし、分析を行った。このアンケートは、授業前の学生のレディネスを把握するために筆者が行っているものである。質問事項「教員になる際、①疑問に思うこと②不安に思うことは何ですか？」
- ⑬高垣マユミ「授業デザインの最前線 理論と実践をつなぐ知のコラボレーション」北大路書房、2005、p.124.